

課題研究論文

「教養教育および教職教育の現状と課題」

教養教育および教職教育を特集するにあたって

びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第5号の特集として、教養教育および教職教育の現状と課題に関する論文の提出が求められた。早速、「共通・教職群」に属している5名の教員が協議し、2007年度については、教養教育に関する論文を1点、教職教育に関する論文を1点、合計2点の論文を提出し、研究紀要編集委員会の要請に応えることとした。

その結果、以下にみられるような2つの論文が提出され、掲載されることになった。

- 青木豊明「スポーツ系の学部を有する4年制大学の教養教育における自然科学系の授業科目の現状」
- 宮本友弘・山口満「教職教育の現状と課題」

これらの研究の一環として、我々は、1つの調査研究を行った。それは2007年度体育大学協議会加盟大学・学部を対象にして、「教養教育・英語教育・教職教育の実態に関するアンケート調査」を行うとともに、各大学・学部の「履修要覧」と「講義概要（シラバス）」の提供を求め、その内容を分析するというものである。調査は2007年8月～9月に実施した。

アンケートに対しては7大学・学部から回答があり、「履修要覧」等については9大学・学部から提供された。それらから得られたデータと情報については上掲2論文において活用されているが、必ずしも十分に活かし切れているとは言えず、今後に課題を残す形になっている。

ともあれ、アンケート調査と資料の提供にご協力をいただいた9大学・学部に対して、厚くお礼を申し上げます次第である。

本学における教養教育担当者は、兼担者と非常勤講師を除くと、一般教育2

名，外国語教育1名の合計3名から成っている。教職課程については，教育学系1名，心理学系1名の合計2名から構成されている。学内の組織としては，両者がまとめられる形で，「共通・教職群」という名称の組織になっているが，それぞれが専門とする研究分野が異なっているだけではなく，学生の教育のミッションや内容，方法等の面でも共通するところが少なく，きわめて便宜的な措置であることは否めない。

近い将来において，本学における教養教育の充実と拡充を図るための教員組織と教育組織が再編成され，スポーツ学の研究とスポーツ技術の向上に重要な役割を果たす「幅広く，多角的な視点を持つことのできる教養」（森昭三編著『スポーツの知と技』大修館，1998，6～7頁）を学生に確実に身につけさせるシステムが構築されることを期待したい。後掲の青木論文は，そうした課題意識に基づいて執筆されたものである。このことは，本論文の「結語」が本学においては「今後，教養教育において基礎的な自然科学系と数学系の科目の充実が必要と考えられる」という文章で結ばれていることに端的に表れているとみることができる。

また，教職教育の現状と課題について宮本と山口が共通に指摘していることは，教職課程担当教員数（2名），教職課程の運営体制等あらゆる点からみて，本学における教職教育と教職課程運営のあり方を全学的な視点から見直し，その改善と充実を図ることが急務であるという認識を持つことの必要性である。学生の教職教育に対する期待はきわめて大きいものがある。一方，我が国の教員養成は中学校・保健体育における「武道」と「ダンス」の必修化，「教職実践演習」（仮称）の新設，「教職指導」の充実，教員免許更新制の導入，さらに母校での教育実習の見直し等大きな改革の流れの中に置かれている。学生の期待に応えるとともに，保健体育科教員養成に対する社会的責務を果たすことができる教員養成の仕組みを本学に確立することの大切さを今こそ自覚し，力強い取り組みを展開することが必要である。後掲する宮本論文は，このことを多様なデータに基づいて，的確に指摘している。

いささか長い前書きになったが，後掲する2論文が書かれた背景や執筆者の課題意識について，若干のコメントを提供した次第である。専門教育と教養教育，そして教職教育がバランスよく組織され，相互に響き合いながら展開されることによって，全人格的な人間形成と「世界に貢献する新しい日本のスポーツ文化の創造」を担うことができる優れた人材を養成することができると確信している。

山 口 満